先端課題研究 19 文献レビュー(歴史学)
一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程
鈴木　良和

ブラッド・S・グレゴリー「小さなものは美しいのか？ ミクロストリアと日常生活史」

Brad S. Gregory, “Is Small Beautiful? Microhistory and the History of Everyday Life”, *History and Theory*, 38-1, 1999, pp. 100-110 (Review of *The History of Everyday Life: Reconstructing Historical Experiences and Ways of Life* by Alf Lüdtke and William Templer: *Jeux D'Échelles: La Micro-Analyse à L'Expérience* by Jacques Revel)

紹介

本稿はアルフ・リュトケ編『日常生活史』とジャック・ルヴェル編『スケールの戯れ』の書評論文である。イタリアのミクロストリアのアプローチをエピソード的ミクロストリアと体系的ミクロストリアに分けたうえで、フレデリック・バルトの人類学の手法をモデルにした体系的ミクロストリアの手法の特徴と限界について論じられている。

○導入部[1]

・近い距離から細部を研究することは対象についてよりよく理解することになるのか。絵画をあまりに近くから見ると、顔料のにじみが芸術作品としての一貫性を失わせてしまう。しかし、筆跡は芸術家の技術について教えてくれる。私たちの過去への理解も同じようなものなのだろうか。こうした問いは、ドイツの日常生活史（Alltagsgeschichte）とイタリアのミクロストリア（microstoria）という、二つの互いに並行しつつもある点では重なり合うアプローチによって提起されている。

・これらのアプローチは二つの論文集によって代表される[2]。一つ目は 1989 年にドイツ語で出版された 8 つの論文の英訳であり、二つ目は 1991 年の社会科学高等研究院で実施されたセミナーに参加したイタリアとフランスの歴史家と人類学者による 10 の論文である。この二つの論文集は、日常生活史とミクロストリアの貢献と限界について考える機会を与えてくれる。

○日常生活史とはなにか

・『日常生活史』の編者であるリュトケは、「日常生活史とはなにか、その実践者はだれか」と題した巻頭論文で、日常生活史の四つの特徴を概観している。

---

[1] 小見出しのタイトルはレビュー担当者が付した。

[2] Alf Lüdtke (ed.), William Templer (trans.), *The history of everyday life: reconstructing historical experiences and ways of life*, Princeton University Press, 1995; Jacques Revel (ed.), *Jeux d’échelles: la micro-analyse à l’expérience*, Gallimard: Seuil, 1996.

①「下からの歴史」の一般的な関心と同じように、日常生活史は普通の人びとの質的な経験に焦点を当てている。すなわち、「歴史上、ほとんど無名のままだった人びとの生活と生存—「名無しの」大勢の人びとの日常の試練や苦難」である。

②このアプローチでは、大きなプロセスを抽象的な国家や市場によって押し付けられた構造や力としてではなく、普通の人びとが貢献したダイナミックな実践の産物として考える。

③この下からの視点は、近代におけるいわゆる進歩、合理化、解放の代償を強調している。

④「日常生活史は小さな単位に集中している」が、リュトケによれば、それは単なる恣意的な好みのためではない。むしろ、個人の生きられた経験を社会的・政治的関係の濃密で複雑なネットワークの中で捉えることで、長期的な歴史的発展に根ざした一義的な解釈に疑問を投げかけるためである。

・日常生活史は「統合史」(integral history)の試みと呼べるかもしれない。それは、普通の人びとの生活経験を、その多様な複雑さにおいて最大限に再現することを可能にするすべてのもの（物質的、社会的、政治的、文化的データ）を特定し統合しようとする試みである。この試みは、スケールを著しく縮小することによってのみ可能となる。実際、ドロテー・ヴィーアリングは、「すべての日常生活史はミクロストリアである」と述べている。

〇エピソード的ミクロストリアと体系的ミクロストリア

・日常生活史は、イタリアのミクロストリア、特にジャック・ルヴェルが編者となった論文集の中で主流となっているタイプのミクロストリアと密接な関係がある。ミクロストリアの実践は多様であるが二つのタイプのミクロストリアを区別することは有益であろう。

①エピソード的ミクロストリア

カルロ・ギンズブルグの『チーズとうじ虫』（1976 年）に典型的なように、一見些細に見える「エピソード」を徹底的に調べ上げ、従来の歴史学の手法では明らかにできなかった社会や文化の側面に光を当てようとするものである。こうしたエピソード的ミクロストリアの実践者たちは、異端審問の記録を用いてエリート文化と民衆文化の関係を探ってきた。

②体系的(systematic)ミクロストリア

体系的ミクロストリアは、社会史を実践する新たな方法である。その指標となるのが、ジョバンニ・レヴィの『無形の遺産 ── ある祓魔師の物語』（1985 年）であり[3]、ルヴ

[3] Giovanni Levi, *L'eredità immateriale: carriera di un esorcista nel Piemonte del Seicento*, G.

ェルの論文集のほぼすべての寄稿者がこの研究を参照している。このアプローチでは、公証人記録、教区簿冊、遺言書などの十分に密度の高い文書史料に基づいて、限られた地理的設定内での個人や家の社会的関係を丹念に再構築することになる。

・ポール＝アンドレ・ローゼンタールが自身の論文「「ミクロ」によって「マクロ」を創り上げる――フレデリック・バルトとミクロストリア」[4]で示しているように、レヴィとその他の寄稿者は、ノルウェーの人類学者フレデリック・バルトの社会的相互作用論の人類学(social interactionist anthropology)を用いている。
・この方法を著しく単純化すると、競争や対立が個々の相互作用〔相互行為〕のレベルで生じているようなあるコンテクストにおいて、すべての観察可能な社会的行動を正確かつ完全に描き出すことから始めて、あらゆる行動の表出(every manifestation)を生み出したプロセスを説明できるような「生成モデル」(generative model)を探し出すという方法である。
・原理的には、適切な生成モデルがあらゆる事例を説明できるので、この方法はマクロ理論では避けることのできない統計上の多数と少数の社会的行動に関する問題を克服することができる。ルヴェル自身も「全体史だが、今回は基礎から築かれたもの」と述べている。こうした試みの基盤となるのは、ミクロレベルでの丹念な経験主義(empiricism)である。そこから共同体の内部や外部との関係性を再構築し、可能な限りそうした関係性に埋め込まれた行動パターンや文化的価値を推量することになる。

〇日常生活史と体系的ミクロストリア

・日常生活史と体系的ミクロストリアには共通性があるが、交換可能なアプローチではない。おそらくもっとも明確な違いは、体系的ミクロストリアにはバルトの人類学が与えた理論的な中心があるのに対して、日常生活史はより折衷的で拡散的な性格を持っている点である。
・日常生活史の歴史家は、なによりも社会関係の具体的な網目の中に位置する普通の男女の生きられた「経験」を再現しようとしているのに対し、体系的ミクロストリアの歴史家は、「社会的な関係性」そのものを歴史的な変化を説明するための基礎として再構築しようとしている。
・日常生活史とミクロストリアはともに、限定された研究対象を十分近くから、細部にわたって研究することにより、従来の長期的な歴史発展の見方や、それに伴う変化の概念に疑問を投げかけている。個々の人間の相互作用のレベルに集中することが、この二つ

Einaudi, 1985. (*Inheriting power: the story of an exorcist*, University of Chicago Press, 1988.)

[4] Paul-André Rosental, “Construire le 'macro' par le 'micro' : Fredrik Barth et la microstoria”, in Jacques Revel (ed.), *Jeux d’échelles: la micro-analyse à l’expérience*, Gallimard: Seuil, 1996, pp. 141-159.

の試みをマクロ原因のパラダイムに基づくケーススタディから区別しているのである。よって、日常生活史もミクロストリアも、単に普通の歴史を小さくしたものではなく、すべてのケーススタディやローカルスタディがミクロストリアになるというわけでもない。

・グリバウディ、ローゼンタール、チェルッティ、レヴィといった体系的ミクロストリアの歴史家たちは、具体的な個々の相互作用のレベルこそが歴史のプロセスにおける「本当の現実」(really real)であると主張し、長期的で人間的ではない力や構造に優位を置くブローデル的な見方を覆している。

・ローゼンタールのミクロストリアの場合、観察された社会形態が生み出されるのは、経験的な社会的因果関係のレベルでの個々の相互作用のレベルにおいてである。

➡これは、この二つの論文集の中で、歴史研究の実践に関するもっとも強力な、また潜在的にもっとも重要な主張である。もしそれが正しければ, 歴史的な変化の源泉は, 大きなスケールの制度（国家)、構造（階級)、機構（市場）などに求めてはならないということになる。なぜなら、歴史的な変化の源泉はそこには存在しないからである。こうしたマクロの現象は抽象的なものであり、それらは無数の具体的な人間のやり取りのダイナミックな流動性の中で表わされる限りにおいてのみ実在するのである。

・日常生活史とミクロストリアは、あるレベルでは、歴史学の大きな物語に挑戦する批判的なアプローチとなっている。レヴィの論文は、15 世紀から 16 世紀のヴェネツィアのある一族の詳細な支出簿を用いて、産業革命以前と以後の消費のあり方に急な断絶があるという考え方に異議を唱えている。同じように、ルッツ・ニートハマーは、第二次世界大戦後の数十年間における旧東ドイツの社会的一体性についての単純な解釈に挑戦するために、オーラルインタビューをうまく活用している。

・ところが、慎重に調査された反例を用いて既成の解釈が不十分であることを示すことによって歴史学に貢献をおこなうという論理は、伝統的なケーススタディとなんら異なるものではない。反例を用いた修正の論理は、日常生活史にもミクロストリアにも固有のものではないのである。

・ミクロストリアと日常生活史は、むしろ、歴史的な知識への実質的な貢献と歴史のプロセスを概念化する点に特徴がある。こうした歴史家たちは個々の人間の行為主体性を強調し、異なる個人や集団にとって、そうした行為主体性が歴史的にどのように制限されているかを明らかにすることに関心がある。根本的には、個人の行動を決定する盲目な歴史的力というスキュラと、根本的に自由な歴史的行為者による自己決定というカリュブディスの両方を回避しようとしているのである。

〇ミクロストリア的な研究の限界

・しかし、過去をそのダイナミックな複雑性のすべてにおいて研究するために、歴史のス

ケールを縮小することには代償が伴っている。

・バルトのモデルが実際にすべての人間の行為や決定を説明できるかどうか、また説明モデルとしての有用性を維持できるかどうかは、当然疑わしいだろう。例えば、このモデルは 17 世紀後半のサンテナという均質な村における、家と土地や遺産との関係といった問いに答えるには有効である。しかし、16 世紀のヨーロッパにおける宗教的帰属や宗教的なコミットメントの特徴についての問いのように、家やその他の社会集団をしばしば分断するような問いに答えることはあまり期待できない。

・例えば、なんらかの「生成モデル」をもって、伝統的な行動や信念を熱狂的に受け入れることから、それらに無関心でいること、それらを暴力的に否定することまでのすべての行動を、社会的階層を横断し、個人のレベルで説明するというのは無理な注文である。逆に言えば、このような多様な行動を説明できるアプローチが作られたとしても、その説明力は、行動の変数が複雑で制限のないものであればあるほど低下するだろう。

・社会史としての体系的ミクロストリアをもっとも熱心に支持する人びとは、その射程を誇張する傾向がある。社会的ネットワークを再構築することで、家や個人の戦略を推量することができるし、近世ヨーロッパの普通の人びとについて新たな価値ある情報を得ることもできる。

・しかしながら、問題となるのは、そのもっとも包括的な意味における下層民(menu peuple)の経験のうち、どれだけがこうした戦略に直接関係しているのか、またそれによって形成されたのかということである。

・歴史家は、公証人文書、教区簿冊、遺言書などの史料に基づいて、個人の人生の選択、世界観、生きられた経験をどれだけ再構築することができるのか。産業革命以前の職人たちが自ら記述した詳細な記録が残っている稀な場合には、彼らの生活が、日記なしでは知り得ないほどはるかに複雑で多面的であったことが明らかになっている。系列的なアーカイブ文書は、17 世紀に生きられた生活の細部、ニュアンス、感覚を同じようには与えてくれない。そのため、人口動態、財政、家の記録に基づいて「経験」を再構築しようという主張には慎重にならざるを得ない。このような史料には、人生の部分的な側面をおぼろげにしか反映していないと考える理由がいくらでもあるのである。ここでは、日常生活史が、体系的ミクロストリアに重要な影響を与えていると思われる。

・史料の性質は、歴史家が再構築しようとする生きられた人間の経験のうち、どのような側面をどの程度再構築するかについて（しばしば苛立たしい）制限を示すことになる。

・ミクロストリアは、1970 年代に始まって以来、研究対象の事例がどれほど代表的で典型的なのかという問いに悩まされてきた。この問いは、特にエピソード的ミクロストリアと、それに結びついたエドアルド・グレンディの「正規なる例外」という概念に当て

はまる[5]。

・しかしながら、体系的ミクロストリアは、この問題を避けるというよりもずらしている(displace)。例えば、レヴィの『無形の遺産』において、研究対象となったサンテナ村がトリノ周辺の「すべての村」を表わすことができるという彼の暗黙の自信は、必然的により広い比較による知識のコンテクストによるものである。ここにこそ、ミクロストリアの批判者がしばしば指摘してきたように、このアプローチの弱点がある。

・A 村の相続パターンや家の戦略は、B 村のそれと比べてどうなのか。同じ時期に、別の地域、別の国の C 村ではどうなのか。経験主義を貫くために、体系的ミクロストリアの歴史家は、自分たちの研究の制限された性格を認識しなければならない。広いコンテクストをすべて排除してしまうこともできるが、それでは「地面から」(on the ground)より広いプロセスを研究したいという願望を満たすことはできない。もし、特定の村がそれ自体を超えるなにかを私たちに教えてくれるのであれば、(体系的ミクロストリアの歴史家は確かにそれを目指しているのである)、より大きなパターンに関するなにかを推測し、知り、期待しなければならない。

・バルトに倣って、歴史的変化の源泉が個々の相互作用に埋め込まれているという考え方が正しいのであれば、ミクロストリアは、ローカルな研究を大きなスケールの現象に結びつけるという問題を比較によって弱めることになるだろう。

・このジレンマに関連して、村よりも大きくて複雑な社会的現実（例えば、数百人ではなく数千人の人口を抱える町や、主要都市）にどのようにしてバルトのモデルを適用するのかという問題がある。体系的ミクロストリアの方法論を真剣に受け止めるならば、それは不可能である。レヴィがサンテナ村を研究したような仕方で、大きな共同体を研究することは、関係する史料の量が多いだけでなく、より複雑で多様な社会的相互作用のために不可能であると思われる。この点を指摘するのは、体系的ミクロストリアを批判するというより、その限界の一つを認識するためである。

・最後に、個人の行為主体性をミクロなスケールで強調し、長期的なプロセスの目的論に疑問を投げかけることは、大きな制度の脆弱性とその発展の偶発性を誇張している可能性がある。例えば、ミクロストリアの研究に基づいて、国家の発展と拡大とは一貫性のない出来事であり、ローカルなレベルにおける無数の個々の社会的相互作用によるプログラム化されていない結果である、と結論付けることができるかもしれない。しかし、それによって国家の現在の制度的な力が弱まるわけではない。したがって、国家は見かけよりも本当は弱いものであると推論すべきなのではなく、ミクロストリアのアプローチでは国家の持つ力を十分に説明できないと考えるべきなのである。

---

[5] 歴史学文献レビュー⑦を参照。

・言い換えれば、ミクロストリアの分析だけでは不十分でありミスリーディングになりうるということである。正確さや説明力という点では、より近くから、より細部を見ることがつねに良いというわけではない。この場合、地図のアナロジーがうまく機能する。誰かが別の都市に車で行きたいときに、建築物の図面を渡すのは間違っている。重要なのは、ある場合にどの地図が必要なのか、異なるスケールの地図をどのように調和させるか、ということである。